



シンポジウム企画の経緯と趣旨（二〇二二年度シンポジウム「『歴史探究』を考える」報告要旨）

池田，拓哉

(Citation)

神戸大学史学年報, 39:11*-11*

(Issue Date)

2024-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491662>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491662>



二〇二二年度シンポジウム『歴史探究』を考える」報告要旨

シンポジウム企画の経緯と趣旨

池田 拓哉

(二〇二二年度副委員長)

二〇二二年度神戸大学史学研究会のシンポジウムでは、同年度に高等教育において新たに開始された「歴史探究」科目（以下、「探究」科目）のあり方やその課題について議論した。「歴史探究」科目の前年に開始された「歴史総合」科目（以下、「総合」科目）については、すでに二〇一九年度のシンポジウムで議論されており、ここでは現役社会科教員等を招いて「総合」科目に関する様々な問題点などが議論された。

「探究」科目が「総合」科目と大きく異なる点は、歴史資料等を積極的に活用し議論することで、歴史的事象を考える技能を身につける点にある。こうしたことから、本科目は「総合」科目よりアクティブラーニング方式を重視することにその特徴があると考えられる。だが、アクティブラーニングを重視した方式は、従来と比べて授業の運営や準備等の面で教員側の負担が増大する恐れが

ある。また、運営の不慣れによって教育現場に混乱を引き起こす可能性もある。

そうした中、史学研究会は学術団体としての性格に加えて、同窓組織としての側面も有し、多数のOB会員が現任教員として教育現場で活躍している。そこで本会では、彼ら教員を交えつつ「探究」科目のあり方や課題を議論する場を設けるべきではないかという視角から、本シンポジウムを企画した次第である。

シンポジウム当日には、長年教育現場に携われておられる大橋康一氏（立命館守山高等学校）をお招きし、「探究」科目の基本的な説明やその課題について講演をお願いした。さらに本会会員で若手教員でもある日本史OBの吉武直哉氏（広島県立高等学校）と西洋史OBの合田和史氏（兵庫県立星陵高等学校）にも、事例報告として「探究」科目における具体的な取組みについて報告をしていただいた後に全体討論へと移った（所属は開催当時もの）。